

特 集

シリーズ 次期学習指導要領を見据えた学校支援①

資質・能力の構造化で見えてくる、 授業改善支援の あり方

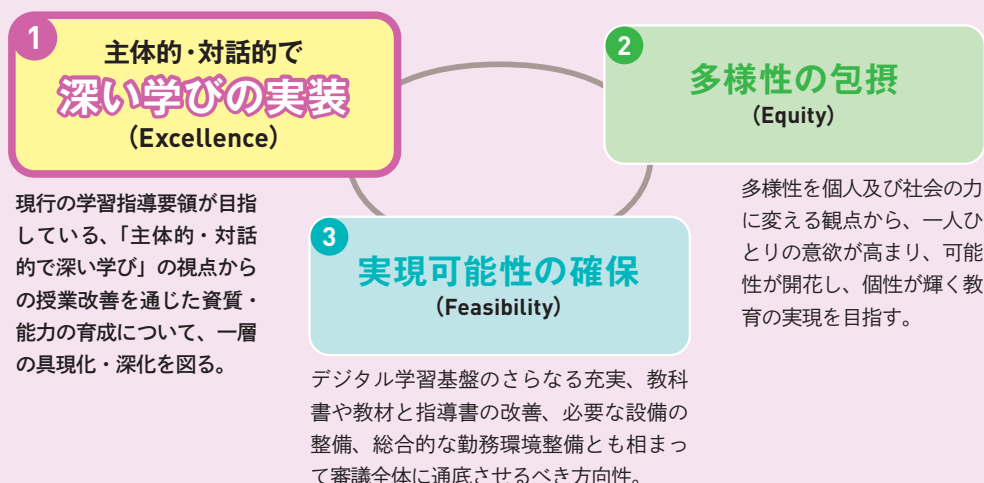
前号の2025年度Vol.3の特集「次期学習指導要領 教委は『論点整理』をどう読み解くべきか」に対して、全国の教育委員会の皆様から「2030年度を待たずに、今から学校現場に伴走して実践を進めていきたい」といった声を数多くいただきました。一方で、「どのような授業を行えばよいのか、実践例を知りたい」といった声もいただいています。そこで2026年度の弊誌の特集は、次期学習指導要領を見据えた学校支援についてシリーズで展開してまいります。シリーズ1回目となる今号は、「論点整理」で示された3つの方向性のうち、「主体的・対話的で深い学びの実装」に焦点をあてます(図)。その構成は以下の通りです。

まず、中央教育審議会の委員の1人である京都大学の石井英真教授が、「学力の3層構造」を基に、「知識及び技能に関する統合的な理解」と「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」の本質を解説します。「答えまでの距離が長い大きな問い」の設定や、教育委員会が学校現場から学ぶ重要性を提言いただきました。続く事例1では、「『問い』を発する子ども」の育成を長年推進している秋田県教育委員会を取り上げ、文部科学省「全国学力・学習状況調査」で全国上位の記述力を支える「秋田の探究型授業」が継続している^{ひけつ}に迫りました。事例2では、最適解・納得解の追究を軸にした授業で、様々な知識・技能が統合された概念的^{ソララン}理解を目指す、福島県・福島大学附属小学校の国語と体育の授業を紹介しています。事例3では、先駆的な挑戦を続ける愛知県・私立瀬戸 SOLAN 学園初等中等部を取り上げ、目指す資質・能力を学びの段階などから整理した、同校独自の「5つの学習様式」や、探究学習を軸にしたカリキュラムで子どもの学ぶ意欲を引き出し、習得と活用の往還を促す様子を紹介しています。

本特集でお伝えしている資質・能力の構造化に向けたアプローチが、各教育委員会における2030年度に向けた授業改善支援のヒントになれば幸いです。

VIEWnext 編集部 小中領域担当責任者 齋藤輝之

図 次期学習指導要領の改訂論議を貫く3つの方向性



2025年度Vol.3の特集「次期学習指導要領 教委は『論点整理』をどう読み解くべきか」の記事は、下の2次元コードからアクセスしてください。



※中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」(2025年9月)を基に編集部で作成。

有識者解説

「答えまでの距離が長い大きな問い」が 子どもの思考を活性化し、知識の統合を促す

京都大学 大学院教育学研究科 教授 **石井英真**^{てるまさ}

次期学習指導要領では、学校現場が「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた単元計画を立てやすくなるよう、各教科等の目標・内容が構造化されて示される見通しだ。それによって授業はどのように改善されるのか。また、教育委員会は学校現場をどのように支援していけばよいのか。中央教育審議会の委員の1人である京都大学の石井英真教授に話を聞いた。

次期学習指導要領の目指す方向性は現行と変わらない

現在、中央教育審議会で議論されている次期学習指導要領では、各教科等の目標・内容が「知識及び技能に関する統合的な理解」と「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」を基に、一層の構造化が図られる見通しです。新たな方向性が示されたように思えますが、その目的は現行の学習指導要領が目指している方向性と変わりません。すなわちそれは、授業で「主体的・対話的で深い学び」を実現し、子どもに「生きて働く学力」を育成することです。

そうした目指す授業の実現に向けた学校現場の単元計画や授業づくりを支

援しようと、次期学習指導要領では各教科等における資質・能力の柱ごとの深まりや、資質・能力の一体的育成を可視化しようとしているのです。

学力を3層で捉え、「できる」と「使える」の往還を図る

各教科等の目標・内容の構造化を理解する上でまず押さえておきたいのが、学力は「知っている・できる」「分かる」「使える」の3層構造で捉えられる点です(図1①)。ここで重要なのは、「知っている・できる」からといって「分かる」とは限らず、「分かる」からといってそれを総合して「使える」とは限らないということです。バスケッ

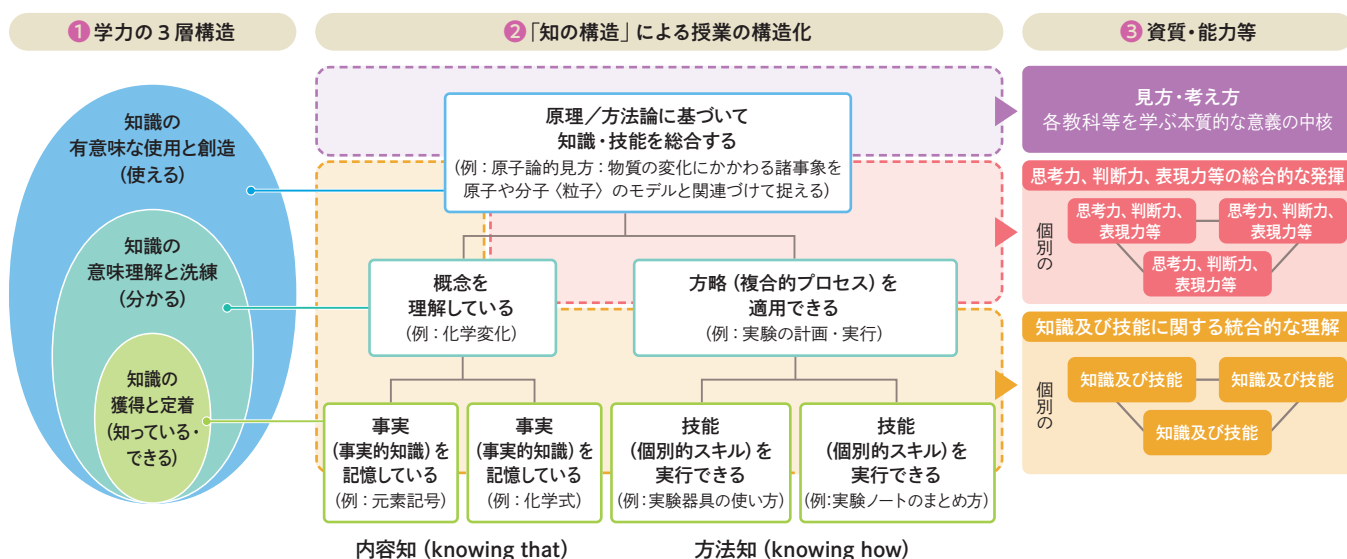


いい・てるまさ

専門は教育方法学。育成を目指す資質・能力を構造化・モデル化し、それらを実現するためのカリキュラム、授業、評価、教員教育について総合的に研究している。近著に『カリキュラム・オーナーシップ 教育課程改革の設計図』(教育開発研究所)、『地味にいい学校』に学ぶ実践のオーナーシップの育み方』(日本標準)等。

トボールで例えると、練習でドリブルやシュートが上手でも(知っている・できる)、ドリブルが試合の中で果たす戦術的意味を理解している(分かる)とは限らず、刻一刻と状況が変わる試合の中でそれらを適切に組み合わせて活躍できる(使える)とは限りません。一方、練習したことを試合で発揮する中で「ドリブルをもっと速くしなけ

図1 学力の3層構造、「知の構造」による授業の構造化、資質・能力等の関係



※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

れば」「シュート前のステップが大事」などと、基礎の大切さに気づくことは練習の工夫につながります。それは授業でも同じです。現行の学習指導要領では「使える」学力が重視され、学校現場ではその育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が行われてきました。そこでは、「習得から活用」と「活用から習得」という往還も必要です。ある程度できるようになったら、実際の文脈で活用し、うまくいかないからこそ基礎へと立ち返り、問題意識を持って知識を吸収しようとする。そして、習得した知識を実際の文脈で活用する。その繰り返しが生きて働く学力を育むのです。

知識・技能の構造を踏まえて授業を組み立てる

次に押さえないのが、知識・技能を構成する「内容知」と「方法知」も学力の3層構造に対応して捉えられる点です。「内容知」は概念的知識の下で事実的知識が結びつき、統合されることで理解が深まります。例えば理科なら、元素記号や化学式の知識が統合され、化学変化という概念を理解できます。一方、「方法知」は個別的スキルの複合によって方略が巧みに遂行されるため、実験器具の使い方や実験ノートのまとめ方を複合的に適用することで、実験の計画と実行ができます。そうして、より高次の内容知と方法知を総合的に活用することで、より大きな概念である「原子論」的な世界観を理解できるようになり、理科の見方・考え方が育ってくるのです。

授業もそうした知識・技能の構造に基づいて組み立てることができます（P.2 図1②）。個別の知識・技能の習得だけではなく、授業の目標をより一般的・抽象的に「メタ化」することで子どもの思考の枠組みが広がり、結果として個別の知識・技能も深まります。それが「知識及び技能に関する統

合的な理解」と「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」であり、両者は切り離すことなく一体的に実現していくものなのです（P.2 図1③）。

子どもの中にモヤモヤが生まれる問いから探究的な学びを展開

授業の目標をメタ化することの意味は、「答えまでの距離が長い大きな問い」（以下、大きな問い）を設定できる点にあります（図2）。例えば社会科では、「近代化とは何か」という大きな問いが考えられます。それに答えるためには、廃藩置県や地租改正などの個別の知識を網羅することでは不十分で、江戸時代と比較して日本の近代化（明治維新）の特徴を考えたり、日本と西洋との近代化の違いを考えたりと、学びはダイナミックなものになっていきます。大きな問いを意識することで、子どもは個別の知識をつなげて統合的に理解し、総合的に思考することができるようになります。

大きな問いは求められる知識の幅が広く、答えにたどり着くためには、既知の知識を整理して統合する思考が必要とされます。モヤモヤを解消したくて他者と話し合う場面も生じますし、その先に納得する・分かるという実感も持てるでしょう。そうした探究的な学びを繰り返すうちに、子どもは「これとこれは同じことを意味しているんだ（一般化）」と気づき、その結果、1つの学びから10を洞察する力（他の事柄へ展開する力）が育つのです。

探究的な学びでは、分からないこと

を性急に解消しようとせず、モヤモヤした状態を引きずることも大切です。問いは、好きや得意といった肯定的な感情だけではなく、「引っかかる」「モヤモヤする」といった否定的な感情からも生まれるからです。

「総合的な学習の時間」などで行う探究学習では子どもから問いが出るのを待つとよいですが、教科学習では教員が仕掛けて、子どもの中に引っかけりやモヤモヤ、小さな「？（はてな）」が生まれるようにすることがポイントです。例えば昆虫の定義を確認した後、「ダンゴムシは虫って言うけれど、昆虫かな？」「カブトムシは？」などと問いかけます。子どものモヤモヤを起点に学びを進めると「もっと知りたい」といった意欲に基づく大きな問いが出てくるはずです。そうしたら「何が昆虫なのかを調べてみよう」などと探究的な学びに発展させます。もはや子どもにとってその問いは、教員が出したものではなく、「自分の問い」となり、子どもはより主体的に学ぶはずです。

大きな問いに取り組むためには、1コマ単位ではなく、単元や題材のまとまりで授業を設計することが求められます。さらに、習得と活用の往還を図る上では、教科内だけでなく、他教科や「総合的な学習の時間」などとの連携も考えるとよいでしょう。

子どもから学んで授業をつくり上げる

大きな問いに誘う出発点である、小さな「？」を子どもの中に生じさせる

図2 「答えまでの距離が長い大きな問い」の例

	社会科	算数・数学科	理科
答えまでの距離が長い大きな問い(原理/方法論)	近代化とは何か	図形の性質をどう一般化するか	酸化の原理とは
概念的知識(概念/方略)	日本の近代化(明治維新)	多角形の内角の和の公式	燃焼、錆の発生、老化の仕組み
個別の知識(事実/技能)	廃藩置県、地租改正など	五角形の内角の和の求め方	木や鉄の燃え方

※石井教授への取材を基に編集部で作成。

資質・能力の構造化で見えてくる、授業改善支援のあり方

ためには、教員が子どもから徹底的に学ぶことが重要です。学校現場の先生方は子どもが漏らす「え？」といった声や疑問の表情をキャッチできているでしょうか。子どもがどのようなことに疑問や引っかかりを覚えるのかを見取り、それを日々の問いづくり、教材づくりに生かしてほしいと思います。そのためには、教員自身が日常の物事に対して引っかかりを覚える感性を磨き、自ら学び続けることも大切です。

子どもの「つまずき」を徹底的に分析することも不可欠です。例えば、小学1年生の中には「11」を「101」と書いてしまう子どもがいますが、それは十進位取り記数法の位取りの概念を十分に理解していないことが原因として考えられます。そうしたつまずきの原因や背景を教員が正しく認識することは、子どもが本質を理解できる授業を組み立てることにつながります。

授業づくりには、「教科の内容理解」も欠かせません。「教科書『を』教えるのではなく、教科書『で』教える」とよく言われるのは、教科書を軽視するという意味ではありません。教科書の内容を深く吟味した上で、目の前の子どもに合った教材や手法を工夫するということです。

例えば、教科書は基本的に見開き2ページで授業1コマ分が構成されています。その2ページを通じて子どもに「何を学ばせたいのか」という本質的な目標をつかみ、その目標に到達する上で目の前の子どもにとって最適な教材や問いを考え、授業を組み立てていきます。そうした教材研究を経ること

で教科の内容理解が深まり、授業力が向上するのです。次期学習指導要領はデジタル化もされるため、単元間の関係性や学年間の系統性などもより把握しやすくなりますから、教員の授業改善は一層進むことが期待されます。

指導が苦手な教科があれば、教員自身が教科書で学び直してみたいかがででしょうか。教科の内容理解が深まったり、新たな気づきがあったりと、授業づくりの視点が得られると思います。

指導主事は教員の授業づくりと学び合う学校づくりの伴走支援を

教育委員会の重要な役割は、そうした教員一人ひとりの学びを後押しすることです。子どもが盛り上がるネタをSNSなどで検索して授業に取り入れる教員もいますが、一過性の盛り上がりは、その後盛り下がるだけですし、何を学んだのかも分からない授業になりがちです。そのため、教員研修では、学習指導要領の解説や教科書を参照しながら、教科の本質を突く大きな問いや単元を貫く課題を考えたり、子ども目線で教科書を読んで引っかかりを見いだしたりと、教員が授業づくりのツボを体験的に学ぶワークもよいでしょう。授業づくりの要である「教科の内容理解」と「子ども理解」にじっくり取り組むことが重要です。指導主事には、教員が単元の本質をつかみ、子どものつまずきを想定できるよう、ともに考える伴走支援が求められます。

若手教員が増えている今、学校全体の指導力の向上を図るため、教員同士

で学び合う学校づくりの支援も欠かせません。教育委員会は校長が考えている学校づくりのビジョンやマネジメントの視点をつかみ、学校単位での取り組みに伴走していくことが大切です。

また、勤務校以外で主体的に学べる「サードプレイス（第3の居場所）」を整えることも、教員の豊かな成長につながります。働き方改革に伴い、自主研究会は縮小傾向にありますが、有志の教員が学校を超えて学び合える場は依然として重要です。学校外の人脈を築くことは、教員の心理的安全性の向上や居場所づくりにも寄与します。

教育委員会も学校から学び、その知見を学校に還元する

学校現場の挑戦を後押しすることも大切です。教育委員会は先生方に「どのような授業をしたいか」を問いかけ、背中を押し、現行の枠組みでどうすれば目指す授業を実現できるのか、その可能性をともに探っていくパートナーであってほしいと思います。そうした挑戦を教育委員会が地域に発信すれば他校の参考になり、地域全体で挑戦する文化も醸成されていくでしょう。

教育委員会は自分たちの提供する教員研修が学校現場にどう生かされているのかを見取り、教員研修のあり方を見直すことも重要です。教員が子どもを見取って子どもから学ぶことの相似形として、教育委員会は学校現場から学ぶということです。

次期学習指導要領では、多様な子どもたちを包摂する柔軟な教育課程の編成が推進されます。そうした状況を踏まえると、教育委員会が各校の状況に応じて学校とともに学校づくりを進めるローカルガバナンス*が重要になっていきます。学校現場の挑戦を後押しし、学校現場から教育委員会も学び、その知見を再び学校現場に還元する（図3）。その循環こそが、子どもの豊かな学びの土台を支えていくのです。

図3 教育委員会の学校支援のポイント

- ・ 授業づくりの要である「教科の内容理解」と「子ども理解」を深める場として、教員が実践的に学べる研修を実施。
- ・ 教員同士が学び合う学校づくりを支援する。
- ・ 自主研修会など、学校を超えて教員が学び合う場をつくる。
- ・ 指導主事は学校現場に足を運び、教員研修などがどう生かされているかを見取る。
- ・ 教員・学校の「こういう授業を実現させたい」という思いに寄り添い、それを実現する方法と一緒に探る。

※石井教授への取材を基に編集部で作成。

* 自治体だけが地域を運営するのではなく、住民やNPO、企業など、多様な主体が協働的に参画して地域課題に取り組むプロセス。

事例 1

「問い」と「振り返り」で深い学びに導く 探究型授業を組織的に実践

秋田県教育委員会

文部科学省「全国学力・学習状況調査」の開始以来、結果が常に全国上位に位置する秋田県。約30年前から、子ども同士の対話を通じて学びを深める「秋田の探究型授業」を実践している。子どもの中で知識・技能が概念化されて生きて働く学力となるよう、子どもの発した問いを基にめあてを設定するとともに、次の学びに活用することを意識した振り返りを行っている。

自治体 概要

2015年度に生活習慣や家庭学習の指針「秋田わか杉 七つの『はぐくみ』」を策定し、学校・家庭・地域が一体となった「オール秋田」で子どもを育成。2025年3月策定の「第4期あきたの教育振興に関する基本計画」では、「地域に根差したキャリア教育」と「『問い』を発する子ども」の育成」を重点課題に掲げ、関連施策を展開している。

人口 約86万7,000人 面積 1万1,637km²
公立学校数 小学校162校、中学校98校、義務教育学校3校、特別支援学校14校、高校44校 児童生徒数 小学生約3万2,000人、中学校約1万9,000人、高校約1万8,000人 教員数 約6,000人

生活習慣も体力も全国上位。 良好な心身が学びの土台

県の教育目標として「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を掲げる秋田県は、文部科学省「全国学力・学習状況調査」において、調査開始当初から全国上位を堅持している。特に記述力が高く、2025年度と同調査の小学校国語では、記述式問題の平均正答率が全国平均を約7ポイント上回った。安田浩幸教育長はその背景をこう説明する。

「本県は昭和30年代に行われていた旧全国学力テストでは結果が低迷していました。そうした課題を受け、教育委員会（以下、県教委）が約30年前に『秋田の探究型授業』（以下探究型授業）の実践を提唱し、今日まで継続しています。探究型授業は、子どもが自ら課題を見つけ、他者との対話を通して課題を解決し、学びを振り返る授業で、その本質は現行の学習指導要領が実現を目指している『主体的・対話的で深い学び』と重なります。主体的に学びを深めるからこそ知識・技能が定着し、他者と意見を交わす経験が高い記述力



教育長

安田 浩幸

やすだ・ひろゆき

秋田県教育委員会高校教育課課長、秋田県立秋田高校校長等を経て、2020年4月から現職。



義務教育課 学力向上・教育
情報化推進チーム
チームリーダー

真崎 敦史

まさき・あつし

秋田県公立中学校教諭等を経て、2025年度から現職。



義務教育課 学力向上・教育
情報化推進チーム
副主幹

佐々木 修一

ささき・しゅういち

秋田県公立中学校教諭等を経て、2025年度から現職。



義務教育課 学力向上・教育
情報化推進チーム
指導主事

矢吹 敦

やぶき・あつし

秋田県公立中学校教諭等を経て、2021年度から現職。



総合教育センター
研修チーム

主幹(兼)チームリーダー

藤谷 寛

ふじや・ひろし

秋田県公立小学校校長等を経て、2026年度から現職。



総合教育センター
教科・研究チーム

主幹(兼)チームリーダー

田口 牧

たぐち・つかさ

秋田県公立中学校教頭等を経て、2025年度から現職。



総合教育センター
研修チーム

主任指導主事

赤川 嗣昭

あかがわ・つぐあき

秋田県公立中学校教諭等を経て、2025年度から現職。

は規則正しい生活習慣と体力を身につけています。加えて幸福感も高く、喜ばしく思います。そうした心身の良好な状態が日々の確かな学びを支えていると考えています」(安田教育長)

子どもが発した問いを基に めあてを設定

全教科で実践されている探究型授業は、子どもが学びの見通しを持ち、個

につながっていると考えています」

生活習慣調査^{*1}や体力テスト^{*2}の結果も同県は全国上位に位置しており、2026年4月には子どもの幸福感が全国1位と報じられた^{*3}。

「家庭の支えもあり、本県の子ども

*1 文部科学省「全国学力・学習状況調査」の質問調査の結果。 *2 文部科学省「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果。 *3 日本経済新聞社の2026年4月17日づけ記事。文部科学省「第4期教育振興基本計画」において、ウェルビーイングに関する指標とされた「全国学力・学習状況調査」の質問調査の9項目について、小・中学生の回答を分析した結果に基づいている。

資質・能力の構造化で見えてくる、授業改善支援のあり方

と集団の学びを通じて考えを深めるための4つの基本プロセス(図1)から成る。それらは必ずしも左から右へ1つずつ進めるものではないと、義務教育課学力向上・教育情報化推進チームの眞崎敦史チームリーダーは説明する。

「基本プロセスは1コマの授業で完結させなければならないものではなく、単元全体の中で学習目標や子どもの状況に応じて弾力的に展開されています。例えば、自分の考えを持って集団で話し合った後、再度個人で思考を深める場を設けたり、単元導入時に1コマを丸ごと使って学習の見通しを持たせたりする場合があります」

現在は、「『問い』を発する子ども」の育成」を掲げ、探究型授業のさらなる充実を図っている。その手立ての1つが、子どもが発した問いを基に単元全体や1コマのめあてを設定することだ。同チームの矢吹敦指導主事は、子どもが必要や課題意識を感じながら学べるよう、子どものワクワク感を何よりも大切にしていると語る。

「先生方には、目指す子ども像を明確にし、子どもが発する『問い』を想定した授業づくりをお願いしています。その上で、想定した『問い』が出なくても本時のねらいを踏まえつつ、子どもの言葉を生かしてめあてを設定することや、『コンパクトでインパクトのある導入』を合言葉に、導入に必要以上に時間を割かず、必要な活動に十分な時間をかけられるようにすることの大切さを伝えています」

別の場面での活用を意識して、学習の内容や方法を概念化

県教委では、子どもが自ら問いを発し、学びが深まるよう、「振り返り」も重視している。総合教育センター教科・研究チームの田口牧主幹はこう語る。

「一般的に振り返りは授業の終わりに行いますが、振り返りを活用するのは新しい単元や授業の導入時です。振

図1 「秋田の探究型授業」の基本プロセス



4つのプロセスは弾力的に活用するものであるため、順序を示す矢印はつけていない。

※秋田県教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

り振り返りに習得した資質・能力を整理できていれば、導入時にそれまでの振り返りと新しい学習内容を結びつけて、『この時はどうなる?』といった新たな問いや、『あの知識が使えるかも』といった解決への見通しが生まれやすくなります。単元をまたいだ『学びの連続性』も実感できるはずです」

さらに、振り返りを学習内容のまともに終わらせず、**学習の内容や方法を「他の学習や生活で生かせるか」といった視点で整理し、概念化すること**を目指している。そのためには、授業や日常生活で子どもを見取り、粘り強く支援することが必要だと、同センター研修チームの藤谷寛主幹は語る。

『「これはこう使える』などと、子どもが学んだことを自ら価値づけし、必要性を感じて活用する経験を繰り返すことが、生きて働く学力や自己調整能力の育成につながります。そのような子どもを育てるためには、教科や日常生活との結びつきを踏まえて、学習の内容や方法が別の場面で応用できる機会を単元計画に組み込むことが求められます。それは難しく、想定通りに授業が進まないことも多々ありますが、概念化までを意識した単元計画の重要性は先生方に繰り返し伝えていきます」

振り返りではデジタル活用を推奨。ある学校は、「既習事項とのつながり」「これから生かしたいこと」といった内容別に色を変えた付せんに入力させて電子黒板で共有したり(写真1)、次に役立つと自分が思う学習内容などをクラウド上の「学びの宝箱」に蓄積したりしている。デジタルであれば量が多くても1か所に蓄積でき、いつでも自分が学んだことを引き出せる。

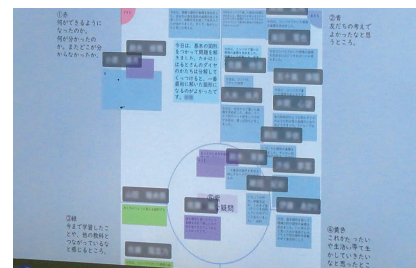


写真1 ある小学校は、端末の付せん機能を活用し、振り返りを「分かったこと」(ピンク)、「参考になった友だちの考え」(青)、「既習事項とのつながり」(緑)、「これから生かしたいこと」(黄)と色分けして入力し、学級内で共有している。

デジタル以外にも、振り返りの内容を模造紙に書いて教室に貼ったり、小型の可動式ホワイトボードに振り返りを貼って教員が授業ごとに移動させたりするなどの方法を提示している。

協働で授業づくりを行い、目指す授業のイメージを共有

同県の強みは、県内8地区^{*4}の授業研究会や年次研修、指導主事の学校訪問などを通じて、多くの教員が目指す授業のイメージを共有できている点にある。そうした場では「対話」を大切にしていると、同センター研修チームの赤川嗣昭主任指導主事は説明する。

「2008年頃から、県の教員研修は指導技術を評価する形から、**参加者がアイデアを出し合い、整理・分類しながら単元計画や1コマの授業をつくる**形に転換しました。それが全県に普及し、各校の授業研究においても教員が協働で授業づくりをし、事後研究では改善案を出し合うことが浸透しています」

授業研究では、子どもから想定した問いが出ない場合や学習内容から逸脱した発言が出た場合の対応のあり方などについても、各自が考えや実践を出し、共有し合う。そうした授業研究を

* 4 秋田県には3つの教育事務所と5つの出張所がある。

資質・能力の構造化で見えてくる、授業改善支援のあり方

新採時から積み重ねるため、教員には子どもの発言や発する問いを大切にす姿勢が身につく、目指す授業のあり方の共通理解も図れるという。

「授業づくりの段階で想定外の事態への対応の仕方についても検討するため、例えば子どもから誤答が出ても、『この答えについてどう思う?』などと、教室全体の学びの機会にするといい、柔軟な対応を取ることが先生方に浸透しています」(田口主幹)

教委は伴走型支援で現場とともに授業をつくる

県教委は伴走型支援で実践的な授業研究を後押ししている。2024・2025年度に実施した「ICTを活用した授業力向上事業」では、3校のモデル校1校あたり2人の指導主事が担当としてつき、各校に年20回ほど訪問して単元計画や授業づくりの議論に加わった。時には指導主事もチーム・ティーチングに加わって子どもの様子を間近で見取るなど、現場とともに授業改善を進めた。モデル校からは「指導主事にすぐに相談できてよかった」「指導主事が一緒に研究を進めてくれたのは心強かった」といった声が上がった。

「かつては指導主事が学校の実践を評価していましたが、本事業では問いの設定や子どもへの声かけなどについて指導主事が教員と一緒に振り返り、どうすれば適切だったのかを考えます。私たち指導主事も、支援を通じて授業がさらによくなり、子どもの表情が生き生きと変化する場にいられたことは大きな喜びでした」(矢吹指導主事)

なお、授業研究会の運営面での準備や実践の記録などは指導主事が担当し、現場の負担軽減に努めた。

キーワードを切り口に授業を見取り、教科を超えて議論

県教委による明確な指針の発信も、

図2 「授業力のキーワード」

① 授業を楽しむ 教員自身が授業を楽しんでいる。	⑥ 見取る力 児童生徒や学級の状況を、表情やつぶやき、ノートやタブレット等への記述内容から見取っている。
② 必要感 児童生徒が必要感を持って「解決したい」と思えるように、導入の手立てを工夫している。	⑦ 児童生徒が主役 児童生徒が自分で解決方法を見いだしたり、助け合ったりしながら学習を進めることができるように、教員の指示や発話の量を調整している。
③ ねらいの明確化 本時で何ができるようになればよいかを明確にしている。	⑧ コーディネート 分かっている・できている児童生徒が活躍するだけでなく、困っている児童生徒の考え等も生かしながら、「分かった」、「できた」につなげている。
④ 学習習慣 発表の仕方、話の聞き方等の学習習慣が身につくように働きかけている。	⑨ 言葉かけ 授業の様々な場面で、児童生徒の発言や頑張ろうとする姿、挑戦する態度等を受容的に取り上げ、認める言葉かけを行っている。
⑤ ICTの活用 授業の様々な場面で、ICT等の効果的に伝わりやすい方法を児童生徒が選択して活用できるようにしている。	⑩ 振り返り 本時の学びや自身の姿を自覚できるように、振り返りの時間を確保している。

キーワードは単独で意識するだけでなく、かけ合わせれば他のキーワードの実現に向けた相乗効果を生み出すことができる。例えば、⑤ICTの活用×⑩振り返りで②必要感を生み出す、③ねらいの明確化×⑨言葉かけで⑦児童・生徒が主役となる、などだ。

※秋田県教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

教員が目指す授業をぶれずにつくることに欠かせない。年2回行われる「全県指導主事連絡協議会」には、県及び市町村の教育委員会の指導主事等が教科ごとに集まる。各指導主事が学校訪問を通じて感じた成果や課題を共有するとともに、「全国学力・学習状況調査」や県独自の学習状況調査^{*5}の結果などを踏まえて、学校教育の方針と当該年度の重点を示した「学校教育の指針」を策定し、全県に発信している。

現行の学習指導要領の実施時には、「主体的・対話的で深い学び」と探究型授業を結びつけて授業改善の方向性を示した「**Akitaractive Eye**」を作成。さらに、「ICTを活用した授業力向上事業」では、探究型授業で大切にしてきた暗黙知を、①授業を楽しむ、②必要感などの10個の「授業力のキーワード」(図2)という形式知として示した。学力向上・教育情報化推進チームの佐々木修一副主幹はこう説明する。

「指導主事が学校訪問する際の視点にして助言でき、校内の授業研究も先生方が同じ視点を持って取り組みやすくなりました。特に学校規模の縮小によって担当が1人の教科がある中学校でも、例えば②必要感をテーマにすれ

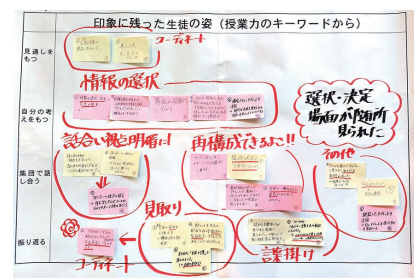


写真2 「授15業力のキーワード」を活用した校内の授業研究では、教員がそれぞれ見取りや声かけなどについて自分の考えを付せんに書き、似た内容をグループ化して、よかった点や課題を可視化していった。

ば、教科を超えて同じ視点で授業を見取れるため、学校全体で授業研究を実施できます(写真2)」

次期学習指導要領を見据えた学校支援も、これまで通り、現場が子ども主体の授業ができるように支えていく。

「議論が進んでいる次期学習指導要領については、議論の資料を精読し、教育の不易を土台にしつつ、時代に即した授業の本質を重点化するものと理解しています。私たち教育委員会の役割は、そうした点を踏まえ、先生方が安心してこれまでの実践を基盤とした質の高い授業改善にまい進できるように支えていくことです。これからも全力で現場に寄り添っていきます」(真崎チームリーダー)

^{*5} 毎年、対象学年の悉皆で、小学4・5年生は国語、社会、算数、理科、中学1・2年生は国語、社会、数学、理科、英語の学力調査と、学習意欲等に関するアンケートを実施。

事例 2

自ら問いを立て、学びを深める教科学習で 「未知に挑む」子どもを育む

福島県・福島大学附属小学校

2025年度まで、「総合的な学習の時間」において子どもが自ら設定した課題に取り組む個人探究を実践してきた福島大学附属小学校^{*1}。教科学習でも最適解・納得解の追究を軸にした授業を実践している。例えば4年生の国語では、和歌を題材に昔の人のものの見方や感じ方を読み解く授業を、6年生の体育では、マット運動発表会に向けて自律して活動する授業を行った。

学校概要

教育目標は「未来の可能性に向かって愛と英知をもち たくましく前進する 創造性豊かな人間の育成をめざす」。2024年度から研究主題を「未知に挑む」として、教科学習や「総合的な学習の時間」の研究に取り組む。2027年4月、附属中学校と統合して義務教育学校となる予定。

設立 1880 (明治 13) 年
児童数 約 610 人
教員数 51 人
学級数 20 学級

子どもが感じた「ずれ」を 起点に、和歌を読み解く

福島大学附属小学校は2024年度から、「未知に挑む子ども」を「答えが1つではない問いに向き合い、考え続ける子ども」として授業研究に取り組んでいる。「探究」を「一人ひとりの子どもが答えが1つではない問いを持ち、目的や状況を踏まえながら試行錯誤を重ね、他者との対話や考察を通して最適解や納得解を追究し続けること」と定義。2025年度は、3～6年生の「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)では各自が設定した課題に取り組む個人探究を、各教科では最適解・納得解の追究を軸とした授業を展開してきた。

例えば4年生の国語では、百人一首の和歌を題材に昔の人と現代の人のものの見方や感じ方の共通点・差異点を見いだす活動を行った。和歌の単元における4年生の目標は、言葉の響きやリズムに親しむことだが、5年生の目標である「昔の人のものの見方や感じ方を知る」という概念化を見据えて本単元を設計した(P.9図1)。

まず、単元の導入で秋を題材にした2首の和歌^{*2}を読み比べた。すると子

どもから、「同じ秋でも一方は自分たちの感覚と似ていて共感できるが、もう一方は詠み手の感じ方に納得できない」という声が上がった。そのずれを起点に、子どもは自分が選んだ2首の和歌に込められた詠み手の思いや詠まれた風景を読み解いた。授業を担当した教育研究部部長の高橋正充先生は、自分と昔の人、双方のものの見方に着目できるように言葉をかけたと語る。

「子どもは恋を詠んだ歌に『相手を感じる気持ちが分かる』と共感するなど、どの時代にも共通する人間の普遍的な感じ方もあれば、時代によって異なる感じ方もあることを実感していました。その見方・考え方は、社会科における歴史の学習などにもきっと役立つことと思います」(高橋先生)

単元の終盤には自分が選んだ和歌の意味を熱く語るなど、昔の人のものの見方・感じ方を理解し、心から百人一首を楽しむ子どもの姿が見られた。

課題解決の方法や学び方を、別の学びに転用する

6年生の体育では、単元末のマット運動発表会に向けて、子どもが自分で



副校長
青田伸一
あおた・しんいち
同校に赴任して2年目。



探究部部長
福永祐一郎
ふくなが・ゆういちろう
体育科。3学年担任。
同校に赴任して4年目。



教育研究部部長
高橋正充
たかはし・まさみつ
国語科。1学年担任。
同校に赴任して5年目。

計画を立てて活動する授業を行った。体育科では「自分が運動して感じた問いを基に取り組む」ことを大切にして単元計画を練っている。本単元は、1・2コマ目にマット運動の既習事項を振り返り、教員が発表会のルールを説明した後、8コマ目の発表会に至るまでの5コマにおける活動をどう進めるかを子どもが自ら決め、自律的に取り組む形にした(P.9図2)。

子どもは各自、「ロンダートができるようになりたい」「後転をよりなめ

*1 同校は2026年6月26～28日に開催される「日本生活科・総合的学習教育学会 第35回全国大会(福島大会)」の会場校の1つであり、6月27日に公開授業・授業研究を実施する予定。

*2 「奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞く時ぞ 秋は悲しき」(猿丸太夫)と「秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出づる月の 影のさやけさ」(左京大夫頼輔)。

らかにする」などの課題を設定。自分の動きをクラスメートに撮影してもらって体の使い方を確認したり、手をつく位置を試行錯誤したりしながら活動に励んだ。発表会後の振り返りで、ロンダートは前方に勢いをつけることが大事」「前転のコツは、頭、背中、お尻を順番にマットにつけること」といった技のポイントが子ども同士で共有されると、ある子どもが「回転系の技はほとんどの技が勢いをつけることが大事なのでは？」と発言。それに周囲の子どもは深くうなずいた。授業を担当した探究部部長の福永祐一郎先生は、「個々の技の知識が共通する概念へと統合された瞬間でした。その気づきが共有されたことで、他の子どもも知識を概念化できました」と語る。

さらに、年度末のサッカーの単元では、「小学校の体育の授業で学んだことを振り返りながら学習を進める」ことを目標とし、単元の進め方やルール的大部分を子どもたちの裁量に委ねた。すると、子どもは「やってみないと課題が分からない」と、まずは試合を行い、「パスが苦手だから練習しよう」「空いたスペースをうまく使えるように作戦を練ろう」などと、自ら課題を見いだして活動に取り組んだ。

「マット運動で学んだ『課題を見つけ、試行錯誤しながら自律的に取り組む』という学習の進め方が、サッカーという異なる単元に転用され、総合的に発揮されていました」（福永先生）

教員の価値づけや声かけが知識の統合や転移を促す

子どもが自分のものとした概念を他の場面で活用する姿は、総合学習や他教科でも見られた。例えば、総合学習でドライヤーの製作に取り組んだ5年生は、その仕組みを理解するために理科の電気回路で学習したことを振り返り、発展的な学習にも取り組んだ。4年生の国語の授業では、1つのテーマ

図1 4年生 国語「ことばのタイムトラベル～和歌の言葉から、昔の世界をのぞこう～」

単元の問い 読み手の思いに納得できる和歌や納得できない和歌があるのかな。

時	めあて	学習活動
1	単元の見通しを持ち、単元全体の問いを見いだす。	秋を題材にした2首の和歌（猿丸大夫・左京大夫頼輔）を対比しながら読み解き、読み手のものの見方や感じ方の違いをクラス全体で共有する。
2 3	探究的に和歌の構造や内容を読み取る。	現代語訳のある百人一首の一覧表を見て、関心を持った和歌を2首選び、読み手の気持ちや情景を想像したり、昔の人と現代の人のものの見方や感じ方の共通点・差異点を考えたりしながら、内容を読み取る。
4	百人一首のかきた遊びをしながら、和歌を味わう。	グループに分かれて、百人一首のかきた遊びを行う。
5	学習を振り返る。	単元の学習を通して気づいたことや考えたことをまとめる。

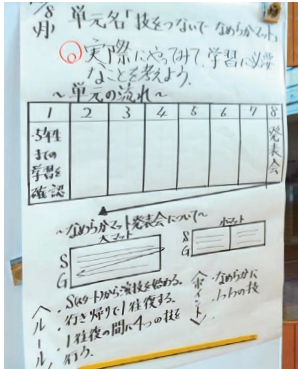
（子どもの記述例）
読み取った
読み手の気持ち

- ・ 清少納言の気持ちは、現代のぼくでもよく分かります。なぜなら、自分がズルで突破した人が許せないからです。一方、紫式部は帰ってしまったことを月に例えていたけれど、その気持ちがよく分かりませんでした。
- ・ 昔からある梅の花はずっと同じだけれど、人の心はすぐが変わってしまうという気持ちが、今の人たちと同じだなと思った。
- ・ 今いる場所もいいけれど、ふるさとが恋しい。その気持ちは納得できる。なぜなら旅行に行った時、何泊かすると懐かしいと思うから。

図2 6年生 体育「技をつないで なめらか マット運動」

単元目標 マット運動の技をつなげて、発表会をしよう。

時	めあて	学習活動
1	これまでの学習を振り返る。	これまでに学習してきたマット運動の技や動きに触れる。
2	発表会に向けて、次時以降の見通しを持つ。	単元末に行うマット運動発表会で使用する器具やルールを教員が説明。自分がどんな技を発表するかをイメージして次時以降の計画を立てる。
3 4 5 6 7	発表会に向けて、自分で課題を見いだして取り組む。	自分の能力に適した技や挑戦したい技を考え、発表会に向けた活動をする。友だちと見合いながら、技巧系や回転系の技を行うための課題や、技を連続してなめらかに行うための課題を見いだして取り組む。
8	発表会で活動の成果を披露する。	マット運動発表会を行う。単元の学習を通して大事だと思ったことや気づいたことなどをまとめる。



体育館に貼られた単元計画表には空欄のコマがある。それは子どもが自分で計画を立て、活動するといった自律的な取り組みを意識できるようにするための。

※図1・2ともに、福島大学附属小学校の提供資料を基に編集部で作成。

から考えを膨らませる活動の際、「総合学習で学んだマインドマップが使えるのでは？」と子どもが提案し、思考ツールを教科学習に生かしていた。

「総合学習と教科学習が結びつくと、子どもの中に教科を学び直したい、さらに深めたいなどと学習の必然性が生まれたり、総合学習で身につけた汎用的スキルを教科学習で活用したりします。『これは別の学びでも生かせよう』とアンテナが立つと、総合的な発揮があらゆる場面で生じるものなのだと感じています。そのためには、子ども任せにせず、教員が指導性を発揮することが欠かせません」（福永先生）

同校では子どもに振り返りをタブレットに入力させ、教員がよいと思っ

た振り返りには印をつけて価値づけし、クラス全体で共有。また、「ほかにどんな時に使えるかな」などと、意識的に子どもに問いかけている。青田伸一副校長は、「先生方は、子どもの『だったら』や『ということは』など、思考を展開する際に使われる言葉を拾い上げ、その発言を価値づけてクラス全体に広げています。それは、教科の枠を超えて知識を統合するきっかけをつくる、教員の重要な役割です」と語る。

子どもが総合学習と教科学習を往還する中で、双方の学びが深まるという相乗効果が生まれている同校。そうした確かな手応えと成果を受けて、2026年度は教科探究を軸とする授業づくりの研究に取り組んでいる。

事例 3

教科学習と探究学習との行き来により、 資質・能力の習得と、それらの総合的な活用を図る

愛知県・私立瀬戸 SOLAN 学園初等中等部^{*1}

「自立し、自律した学習者」の育成を掲げて 2021 年 4 月に開校した愛知県・私立瀬戸 SOLAN 学園。資質・能力の習得と、それらを総合的に活用する探究学習とを行き来しながら学びを深めていく「5つの学習様式」を開発し、子どもが自分の興味・関心を追究する「個人探究」を軸とした独自のカリキュラムを設計している。

学校 概要

愛知県瀬戸市の公立小中一貫校の開校に伴って閉校した中学校の跡地を利用し、2021 年 4 月に小学校を開校。2025 年 4 月に中等部を併設して小中一貫校となる。教育課程特例校の指定を受け、探究学習を軸にしたカリキュラム編成や、日本人教員と外国籍教員による 2 人担任制など、独自の教育を展開。

設立 2021 (令和 3) 年
児童生徒数 約 440 人^{*2}
教員数 65 人 (うち外国籍教員 22 人)
学級数 19 学級

「5つの学習様式」を基に 授業をデザイン

愛知県瀬戸市は、名古屋市の中心部から車で約 40 分の場所に位置する。私立瀬戸 SOLAN 学園は、「グローバルシチズンシップの育成」を建学の精神に掲げ、目指す子ども像に「自立し、自律した学習者」を据えて 2021 年 4 月、その地に開校した。創立者の長尾幸彦理事長は開校への思いをこう語る。

「先行きが不透明な現代においては、他者から知識を与えられ、覚えるのではなく、主体的に学び、生涯にわたって成長し続けられる力を子どもたちに育みたいと考えました。その目標の達成に向けて、既存の枠組みにとらわれず、カリキュラムや指導体制、施設などはすべて子ども目線でつくりました」

同校は文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、子どもが自分の興味・関心を起点とした課題に取り組む「個人探究」を軸にカリキュラムを設計している。学校づくりの中心を担う三宅貴久子副校長は次のように説明する。

「『自立し、自律した学習者』を育成するためには、自分で課題を見つけ、解決方法を導き出し、自ら調整しながら

ら取り組む『個人探究』が必須だと考えました。現行の制度下で個人探究を最大限充実させるためにはどうすればよいか、皆で議論を重ねてカリキュラムを設計しました」

具体的には、学習指導要領で育成が求められている資質・能力を「教科固有のもの」と「汎用的なもの」に分けた上で、「習得」「活用」「探究」の学びの段階に整理し、さらに学習対象や学習目標などの視点から「5つの学習様式」に分類した (P.11 図 1)。

- ① **スキル・リテラシー** 漢字や計算、考える技など、すべての学習基盤となる知識・技能を習得する。
- ② **教科基盤学習 + 活用** 覚えた知識・技能を教科の文脈に沿って活用し、概念的知識や手続き的知識を習得する。
- ③ **教科探究 (教科型プロジェクト)** 教科の見方・考え方を働かせながら、概念的知識や手続き的知識を活用する発展的な課題に取り組む。
- ④ **チーム探究 (教科横断型プロジェクト)** 各教科で習得した資質・能力を総合的に発揮して社会課題などに取り組む。
- ⑤ **個人探究** 自分の興味・関心を起点とした課題に取り組む。



理事長兼校長

長尾幸彦

ながお・ゆきひこ

教育情報化コーディネータ1級として、全国教育委員会のコンサルタントを担当した経験に基づき同校を設立。



副校長

三宅貴久子

みやけ・きくこ

公立小・中学校教員、関西大学初等部教員等を経て、開校の準備段階から着任。



理事長室長

横尾圭二

よこお・けいじ

私立中学校や高校の教員を経て、2022 年度に着任。



2年生担任

樋口万里子

ひぐち・まりこ

新卒採用で着任し、現在 4 年目。

教科学習と探究学習との 行き来が、学びの原動力

5つの学習様式において重要なのは、①～③の教科学習と④・⑤の教科を超えた探究学習とを行き来しながら学ぶことにあり、三宅副校長は語る。

^{*1} 同校では初等部は1～5年生、中等部は6～9年生としている。 ^{*2} 2026年度は1～8年生が在籍。

図1 5つの学習様式

学習 様式	カリキュラムの構造			時間	学習の対象	資質・能力	学習の 主導者	到達 目標	期待する 児童生徒の姿
⑤	探究学習 教科を超えた ↑ ↓ 教科学習	個人探究	創り出す	90 分	個人の興味・関心	課題解決力／自己調整力／ コミュニケーション／レジ リエンス	子ども	全員違う	活動に没頭し、自ら学 習を創る
④		チーム探究（教科横断 型プロジェクト）	つなぐ	90 分	自然環境・地域・国 際などの社会課題	課題解決力／思考力・判断 力・表現力等／協働する力	子ども 教員	全員同じ + α	どの教科の知識・技能 を活用するかを考える
③		教科探究 （教科型プロジェクト）	使う	45 ～ 90 分	教科の応用・発展的 な内容	課題解決力／思考力・判断 力・表現力等／学びに向か う力、人間性等	教員	全員同じ	教科の文脈で教科の見 方・考え方を働かせて いる
②		教科基盤学習＋活用	分かる	30 ～ 45 分	教科の基礎・基本	知識及び技能／思考力・判 断力・表現力等／学びに向 かう力、人間性等	教員	全員同じ	教科に浸る、活動を通 じて学ぶ
①		スキル・リテラシー	知る・ できる	15 ～ 30 分	漢字／計算／考える 技など	知識及び技能	教員	全員同じ	記憶し、再生できる

※瀬戸 SOLAN 学園初等中等部の提供資料を基に編集部で作成。

「本校では1年生から④チーム探究や⑤個人探究を行います。学びもスポーツと同じで、知識・技能を覚える練習だけでは子どもは伸びません。覚えた知識・技能を発揮する試合をしてこそ真に身についた力が分かり、自分には何が不足しているかが実感できるため、教科学習にも主体的に取り組むようになります。教員も個人探究での子どもの姿を見取り、教科学習や個別支援に生かしています」

2年生担任の樋口万里子先生は、個人探究が教科学習に取り組む意味を見いだす機会になっていると語る。

「ある1年生が『探究の時間に本をここまでしか読めなかった。1年生の間にもっと読めるようになりたいから、漢字の勉強を頑張る』と言いました。自分の好きなテーマを深める学びがあることで、知識・技能の習得は『やらされる学習』ではない、目的を持った学びになっています」

探究学習の基盤となる教科学習も丁寧に指導している。①スキル・リテラシーは4年生までに集中的に身につけさせ、5年生からは③教科探究の比率を増やしている。

「教科学習では、教科書の内容をページの順番通りにすべて教えるというよりも、教科書を教材の1つと考えて単元計画を立てています」（樋口先生）

一方で知識・技能の定着が不十分な

子どもには個別に支援している。1～3年生では個々の課題に応じたプリントを配布し、保護者と連携して家庭学習の充実を図っている。4～5年生では家庭学習に加えて、隙間時間や放課後に10分程度のプリント学習に取り組ませ、6年生以上では放課後補習を週2回行い基礎学力を担保している。

1コマの授業時間は学習内容に応じて弾力的に設定。集中力が求められる①スキル・リテラシーを習得するための授業は15～30分間とする一方で、④・⑤の探究学習はじっくり取り組めるように90分間としている。1コマの授業時間が複数あるため、時間割は固定せずに週単位で作成し、子どもと保護者に毎週配布している（図2）。

興味・関心を追究できる環境が主体性や創造性の発揮につながる

個人探究は9年間を4段階に分けて進めている。1・2年生（導入期）は自分の興味・関心を見つけることを重視し、3～5年生（展開期）でその興味・関心を深く追究する。6～8年生（充実期）では探究テーマを社会とつなげ、社会貢献を視野に入れた活動を展開。9年生（統括期）ではそれまでの活動を振り返って論文にまとめることで、自身のあり方や生き方を見つめ直す。

個人探究は週1回で、子どもが活動

図2 時間割（例）

		2年生	
		5/13	5/14
8:45-9:00	My Time	My Time	
1 9:10 ～ 9:55	チーム探究 Team inquiry Wonder Farmer Project	国語 たんぼぼのちえ②	
2 10:00 ～ 10:45		体育 P.E 体ほぐし運動	
3 11:10 ～ 11:55	English Let's Explore Nature	English Let's Explore Nature	
4 12:00 ～ 12:45	漢字	算数 Math かけ算 7のたん	
	書くスキル Writing skill		
給食・昼休み			
5 13:40 ～ 14:25	国語 たんぼぼのちえ①	漢字	
		情報 ICT 数 Numbers	
6 14:30 ～ 15:15	算数 Math かけ算 6のたん	English Phonics Unit2	
掃除			
15:30-15:45	My Reflection	My Reflection	

「My Time」は子ども自身が活動内容を考え、それに取り組む時間、「My Reflection」は1日の学校生活を振り返る時間だ。黄色の地色は探究学習の時間。※瀬戸 SOLAN 学園初等中等部の提供資料を基に編集部で作成。

に没頭できるように2コマ続きの90分間を確保している（P.12写真1・2）。

「自分の興味・関心をとことん追究できる環境だからこそ、子どもは主体的になり、創造性を発揮します。探究の過程で学年を超えた高度な内容に興

資質・能力の構造化で見えてくる、授業改善支援のあり方

味を持ち、異なる領域に踏み込む中で自分に足りないものに気づき、既習事項に戻って学びを深める。その往還によって知識・技能が統合されて概念化し、思考力なども総合的に発揮されます。それが自己を成長させ続ける力になると考えています」(三宅副校長)

探究のテーマは多種多様で、例えば8年生には、自校を社会に広くPRしたいと校章入りのグッズ製作を計画する生徒や、地域活性化を目指して商店街での親子参加型のイベントを企業と連携して企画する生徒などがある。

探究のテーマが決まらなかったり、途中で失敗したりして、探究が深まらないまま発表を迎える子どもがいても、教員は決して否定せず、子どもの相談にとことん乗り、寄り添い続ける。そうした支援を通じて、子どもはテーマを熟考する重要性を学んでいく。ある8年生は、「昨年度設定したテーマは本当にやりたかったことからずれてしまい、最後まで納得のいく探究ができなかった。今年度は考え抜いてテーマを決めたい」と、失敗を糧に前を向いている。

同校では探究学習を資質・能力を総合的に発揮する場と捉え、「課題解決力」「自己調整力」「コミュニケーション力」「レジリエンス」の育成を目標としている。そのため、毎時間の振り返りでは、「何をしたか」「何を頑張ったのか」「何が難しかったのか」「次の時間はどのようなことを頑張るのか」を端末に入力し、写真などの学習の記録も添付する。教員は入力内容と授業での子どもの様子を照らし合わせて見取り、次の支援に生かしている。

また、同校が採用する4学期制^{*3}も、子どもの学びを捉える上で大きな役割を果たしている。横尾圭二理事長室長は次のように説明する。

「教員は3か月ごとに自身の指導を振り返り、軌道修正をすることができ、子どもにとっても、3か月ごとに1～2週間の休みがあることで、適



写真1 調べるものをする子どもや先生に相談する子ども、友だちと話し合う子どもなど、各自の方法で探究学習を進める。その一人ひとりに教員は寄り添う。



写真2 下級生が自分の学習の参考にできるように、探究学習を支える環境がデザインされた「ラーニングcommons」の壁や窓には、高学年の子どもがまとめた個人探究のポスターを掲示。それを見た下級生は自分の個人探究の参考にしている。

度にリフレッシュして各学期を元気に過ごせます。長期休業中に生活リズムを崩す子どももほとんどいません」

週2回の校内研修で指導力を磨き、指導の具体を共有

同校の指導の理念や具体を教員間で共有する場が週2回の校内研修だ。放課後に1時間、全教員が集まり、火曜日は「授業力向上」、木曜日は「探究」「ICT」「英語」をテーマに話し合う。

「各教員が自分が実践していることを共有し、具体的な指導方法や子どもを見取る視点を学んでいます。また、探究学習には教科書や指導書が存在しないため、子どもの具体的な姿を基に議論することで、支援の内容を学べるようにしています」(三宅副校長)

教職歴4年目の樋口先生は、「自分が行った授業や活動の意図、見取った子どもの様子などを言語化できる機会が週に2回あり、それに対して他の先生からアドバイスをもらえるのはとても勉強になります」と語る。

探究学習の支援では保護者の存在も

図3 「個人探究」子どもの取り組み例

8年生Aさん 大好きな折り紙の魅力を伝えようと「折り紙のアクセサリの製作・販売」に挑戦。デザイン性や軽量性を維持しながら耐久性を向上させるために、理料的な実験を重ねた。また、金融に詳しい保護者サポーターに相談しつつ自分で価格を設定。教科横断的な知識を活用し、子ども主催の地域交流の場「SOLANフェスタ」での販売を実現させた。「利益が出てうれしかった反面、製作に時間がかかったため、手間に見合った価格設定や量産化、差別化の難しさを痛感しました」と語り、それらの克服を2026年度の探究のテーマとした。

8年生Bさん 海洋ゴミが生態系に悪影響を及ぼす問題に対し、自分にできることはないかと考え、ゴミの再利用をテーマにした探究を始めた。次第にゴミの回収へと問題意識が発展し、2026年度は海洋ゴミ回収ロボットの製作に取り組む。昨年度はロボットに詳しい先生に相談しながら、電気回路や素材、プログラミングなどの知識を統合し、試行錯誤して設計図を完成させた。現在は実作段階に入り、「初めて目にする部品は生成AIの画像認識で調べ、コードの記述も生成AIに相談して参考にしています。入手困難なパーツは3Dプリンターで作りました」と、デジタル技術も駆使して製作中だ。

欠かせない。同校は入試の合格標準の1つとして、「保護者が建学の理念や指導理念に共感し、パートナーとして学校をともにつくっていかうこと」と明記している。そのため、有志の保護者が「保護者サポーター」として個人探究の授業に参加し、子どもの相談に乗ったり、自身の専門知識を生かしてアドバイスしたりしている。自分の金融知識を生かして参加している保護者サポーターは、「探究学習で思考力が高まれば、子どもはいろいろな場面で自立・自律して活動するようになるのだと実感しました」と語る。

教員や保護者の支援を受け、子どもは自分の興味・関心をとことん追究し、成果を誇らしく語る(図3)。そうした姿がすべての子どもで見られるように、同校は今後も挑戦し続ける。

「最初は自分の興味・関心が出発点でも、探究を深める中で意識が自然と外に向き、社会とつながります。今後個人探究を一層充実させて、社会で大きく活躍する子どもを育てていきたいと思います」(横尾理事長室長)

* 3 4～6月が1学期、7～9月が2学期、10～12月が3学期、1～3月が4学期。学期間の休業は6月中旬に10日間、8月上旬に2週間、9月下旬に1週間、年末年始に2週間、3月下旬に2週間設けている。

参加対象
教育委員会
部・課長、
指導主事

7月21日(火)開催 オンライン座談会のご案内

次期学習指導要領を見据えた学校支援 資質・能力の構造化で見えてくる、 授業改善支援のあり方

VIEWnext教育委員会版の特集テーマと連動して開催しているオンライン座談会。今回の座談会のテーマは「授業改善の支援」です。次期学習指導要領では、各教科等の目標・内容の一層の構造化が「知識及び技能に関する統合的な理解」と「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」を基に図られる見通しですが、それによって授業はどのように改善されることになり、その際、教育委員会にはどのような支援が求められるのでしょうか。京都大学の石井英真教授による解説とともに、学力・体力・生活習慣の各種調査で全国上位に位置する秋田県が取り組む「探究型授業」を紹介。両者による座談会を通して、次期学習指導要領を見据えた授業改善支援のあり方を深めます。

登壇予定者



石井英真

いしい・てるまさ
京都大学 大学院
教育学研究科
教授



安田浩幸

やすだ・ひろゆき
秋田県
教育委員会
教育長



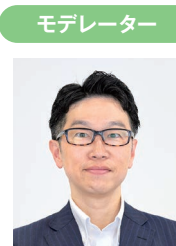
真崎敦史

まさき・あつし
秋田県教育委員会
義務教育課 学力向上・
教育情報化推進チーム
チームリーダー



藤谷 寛

ふじや・ひろし
秋田県総合教育センター
研修チーム
主幹(兼)チームリーダー



齋藤輝之

さいとう・てるゆき
ベネッセコーポレーション
VIEW next 編集部
小中領域担当責任者

モデレーター

開催日時 2026年7月21日(火) 16:50 ~ 17:50

形式 オンライン(ZOOM) 参加費 無料

主催 ベネッセコーポレーション VIEWnext編集部

対象者 教育委員会 部・課長、指導主事

プログラム(予定)

- ・石井英真教授 解説「生きて働く学力の育て方」
- ・秋田県教育委員会 実践紹介「授業力のキーワード 10とは？」
- ・パネルディスカッション

*オンライン座談会実施後のアーカイブ提供はございません。

*お申し込みをされた方に、詳しい参加方法をご案内します。

問い合わせ先 VIEWnext編集部 view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

*プログラムの内容は変更になる可能性があります。あらかじめご了承ください。

*本オンライン座談会へのご参加には、スマートフォン・タブレット・パソコンのいずれかが必要です。接続にかかる通信費用は、参加される方のご負担となります。

参加申し込み方法

右記の2次元コード、
または下記URLから
お申し込みください。



<https://enquete.benesse.ne.jp/forms/o/we78d586d5/form>

参加申し込み締め切り

2026年7月14日(火)